



Title	地域・場所における水資源の概念と持続的利用に関する研究
Author(s)	吉住, 優子
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46957
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 よし 吉 住 優 子

博士の専攻分野の名称 博 士 (工 学)

学 位 記 番 号 第 20373 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 18 年 3 月 24 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第1項該当

工学研究科建築工学専攻

学 位 論 文 名 地域・場所における水資源の概念と持続的利用に関する研究

論 文 審 査 委 員 (主査)

助教授 鈴木 毅

(副査)

教 授 奥 俊信 教 授 横田 隆司 教 授 澤木 昌典

助教授 木多 道宏

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、親水空間整備や水資源を生かしたまちづくりと、水に関わる環境整備の重要性が高まる現在において、水環境のデザインや維持の在り方を検討し、デザインされた水環境の持つ意味や、既存の水資源が現代社会の中で有する役割について体系的な分析を行ったものであり、全5章で構成されている。

第1章は序章であり、本研究の背景と目的、及び関連する既往研究についての概要を記述した。また水資源、及び水環境を分析するために用いた6つの観点、実用性、生態性、社会性、景観性、活動性、心理性、をここで定義した。

第2章では、近年、水環境として何が作られようとしているのか、その方向性を提示した。まず最近の水資源を用いたデザインを資料により取り上げ、デザインの考え方やデザイン意図の位置付けを、上記した6つの観点より分析した。結果、15年間で実用性から社会性、景観性に、最近では生態性、心理性、活動性に、といった観点の推移があることを明らかにした。さらに、水環境に対して人々は何を期待しているのか、その傾向を探るため一対比較法による画像写真を用いた実験を行った。結果、①人工的に華やかな動きを持たせた水とその動きを体全体で楽しむことの可能なデザイン、②地域的な祭事空間や心理的な安らぎをもたらす空間としての水環境に評価が集まる傾向を明らかにした。

第3章では、上記した6つの観点が引き継がれている実際の事例に着目し、水資源が維持・継承されている仕組みを明らかにすることで、現代社会に成立し得る水環境の在り方について考察した。着目した地域は「長崎県島原市の湧水群」であり、江戸時代における水と人との関わりを歴史的文献及びヒヤリングにより再現した後、それが現在に至るまでどのように変化し継承されてきたのかを地域的視点から論じた。①廃藩後、藩所有であった水資源が個人所有と変化した後も、当時の規則を守り続けていること、②水道整備に伴い水資源の共同利用が減少した後も、関連行事のみは簡略化されながら個人により引き継がれていること、③雲仙普賢岳噴火災害の影響による水源の枯渇で、住民の水資源に対する保全意識が高まり、新たな水環境の整備が進められていること。これら3つの社会的転機を、地域がどのように経て持続的な利用を行ってきたのか明らかにした。

第4章では、島原市の中で利用者、利用用途の最も多い湧水洗い場「浜ん川」に着目し、夏季・冬季の利用観察調査により、維持管理の総合的な仕組みの分析を行った。①用途別に区切りを設けた洗い場の明確なデザイン、②新しく生まれたルールの慣習的な共有、③水神様の存在による緩やかなモラル形成、④ゆずり合いや遠慮といった他者へ

の配慮による利用時のコミュニケーション、⑤これら日常生活で生まれる様々な共同利用の知恵をもとに、水資源の持続的利用の仕組みを場所的視点から明らかにした。

第5章は結論であり、以上で得られた結果をまとめて示した。また、継続的に維持利用されている水資源をコモンズとして捉え、その持続性の要件と、それが現代社会に成立し得る在り方について述べた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、水環境のデザインや維持の在り方を検討し、デザインされた水環境の持つ意味や、地域の既存の水資源が現代社会において持つ役割について分析・考察を行ったものである。具体的には、水環境に関するデザイン事例の分析とそれを用いた心理実験、および長崎県島原市の湧水群を対象としたフィールドワークによって、水環境・水資源の意味と持続の仕組みについて明らかにしている。得られた結果を要約すると以下のとおりである。

(1) 文献から1983年以降の水資源を用いたデザイン事例を取り上げ、デザインの考え方や意図を、実用性、生態性、社会性、景観性、活動性、心理性の6つの観点に分類した上で分析し、デザインの志向が15年間で、1991年までの実用性の後、社会性、景観性に、1996年以降は生態性、心理性、活動性に推移したことを明らかにしている。さらに一対比較法による画像写真を用いた心理評価実験を行い、①人工的に華やかな動きを持たせた水とその動きを体全体で楽しめるデザイン、②地域的な祭事空間や心理的な安らぎをもたらす空間としての水環境が高く評価される傾向を明らかにしている。

(2) 「長崎県島原市の湧水群」を対象として、江戸時代における水と人との関わりを歴史的文献とインタビューにより再現し、それが現在に至るまで3つの社会的転機を経て、どのように変化し継承されてきたのかを分析し、①廃藩後、水資源が藩所有から個人所有に変化した後も、当時の規則を守り続けていること、②水道整備に伴い水資源の共同利用が減少した後も、関連行事を簡略化しながら小規模単位での利用が引き継がれていること、③雲仙普賢岳噴火災害による水源の枯渇で、住民の水資源に対する保全意識が高まり、新たな水環境の整備が進められていることを明らかにしている。

(3) 島原市の中で利用者、利用用途の種類の最も多い湧水洗い場「浜ん川」を対象として、夏季・冬季の利用観察とインタビュー調査により、洗い場の利用実態と利用維持管理の総合的な仕組みの分析を行い、男女各世代が日常的に洗い場を多様に利用（洗いもの、身支度、遊び・交流等）していること、その背景として、①用途別に区切りを設けた洗い場の明確なデザイン、②新しく生まれたルールの慣習的な共有、③水神様の存在による緩やかなモラル形成、④ゆずり合いや遠慮など他者への配慮による利用時のコミュニケーションなどの特徴的な実態と仕組みがあることを明らかにしている。

(4) 水環境の価値と水資源の持続的利用の仕組みを場所的視点から捉えることの意義を論じ、島原各地区と「浜ん川」の水資源の利用と維持の実態の比較等を通じて、今後の水環境のデザイン・維持に向けて考察し、①日常生活に組み込まれた利用、②利用者自身による管理運営、③様々な利用者による多様な利用を通じて生まれるコミュニケーションと規範、④資源に対するいわゆるコモンズ的な共有認識、などの重要性和それらを踏まえた計画への可能性を指摘・提言している。

以上のように、本論文は、多数のデザイン事例を対象とした分析、および綿密なフィールドワークを通じて、人間や地域社会における水環境の意味と、水資源の持続の仕組みに関する、貴重な知見を提出しており、建築計画、都市計画の発展に寄与するところ大である。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。